

交 流

〈大会発表要旨〉

◆和田英信 李白の詩について 碩学

錢鍾書は、中国古典詩には〈唐詩〉と〈宋詩〉の二大様式があると指摘した。唐を代表する詩人李白と杜甫の両者はともに〈唐詩〉の完成者であり、かつ杜甫は〈宋詩〉の開拓者でもあった。今回の発表では、現代における李白詩研究の可能性について、現段階で考えるところの一端を述べた。一つは、李白と杜甫との対照研究。李白における〈唐詩〉的なもの、杜甫における〈宋詩〉的な要素の内実を分析することによって、中国古典詩のありかたとその歴史の変遷のメカニズムを理解するヒントが与えられるであろう。二つ目には、李白集に少なからず見いだされる文字の異同について。現存の李白集には李白自身による改訂の過程にあると思しきものが少なからず残存している。テクスト生成の過程に目を止めることによって、新たな作品の読みの可能性が認められるかも知れない。

三つ目には、李白詩の解釈について。優れた作品ほど多様な読みの可能性を内包する。作品を丁寧読み込むことによって、李白詩の豊饒をさらに見いだすことができるはずだ。文学研究においては、作品の読みを深めることがその究極の目標であることは動かない。

◆伊藤さとみ 中国語選択疑問文の情報構造

文の情報構造（既知／新情報、話題／焦点）は、韻律に反映されることが知られており、焦点はストレスで具現化される（Selkirk 1984）／ストレスを持たなければ、焦点ではない（Schwartzschild 1999）、と一般化されてきた。本発表では、選択疑問文と選言疑問文の情報構造について、中国語の例文容認度と音声データから論じた。

◆趙美子 曹丕と曹植―史実と作品をめぐって―

本発表は先行研究を踏まえて、曹丕と曹植に関する若干の史実と作品を再検討し、二人の関係について従来の解釈の見直しを試みた。建安年間の曹丕と曹植は、詩文の唱和や日常のやり取りをよくしており、一貫して親しい関係を保っていた。いわゆる「後継争い」は、二人の関係にはほとんど影響を与えなかった。曹丕即位後、曹植を迫害しようとするのがなく、逆に同母弟である曹植に特別な配慮を払い続けたと言える。

まず、選択疑問文 “p 还是 q” については、選択肢部分では、不定名詞句が現れにくく、裸名詞句は既知の解釈を受けられる一方で、選択肢部分を話題化できないことから、既知情報の焦点であると述べた。このことは、閻錦婷等 2014 の音韻的研究からも支持される。次に、選言疑問文 “p 或者 q 吗” でも、同じような文法的制約や音韻的特徴がみられることをデータの分析に基づいて明らかにし、中国語の選択疑問文と選言疑問文は、形式上の違いはあるが、その他にはあまり違いがないことを指摘した。最後に、この結果を踏まえると、両疑問文の意味について、従来提案されてきた意味形式は問題があり、新しい意味形式の提案が必要であると述べた。

〈例会発表要旨〉

詩の開拓者でもあった。今回の発表では、現代における李白詩研究の可能性について、現段階で考えるところの一端を述べた。一つは、李白と杜甫との対照研究。李白における〈唐詩〉的なもの、杜甫における〈宋詩〉的な要素の内実を分析することによって、中国古典詩のありかたとその歴史の変遷のメカニズムを理解するヒントが与えられるであろう。二つ目には、李白集に少なからず見いだされる文字の異同について。現存の李白集には李白自身による改訂の過程にあると思しきものが少なからず残存している。テクスト生成の過程に目を止めることによって、新たな作品の読みの可能性が認められるかも知れない。

三つ目には、李白詩の解釈について。優れた作品ほど多様な読みの可能性を内包する。作品を丁寧読み込むことによって、李白詩の豊饒をさらに見いだすことができるはずだ。文学研究においては、作品の読みを深めることがその究極の目標であることは動かない。

本発表は先行研究を踏まえて、曹丕と曹植に関する若干の史実と作品を再検討し、二人の関係について従来の解釈の見直しを試みた。建安年間の曹丕と曹植は、詩文の唱和や日常のやり取りをよくしており、一貫して親しい関係を保っていた。いわゆる「後継争い」は、二人の関係にはほとんど影響を与えなかった。曹丕即位後、曹植を迫害しようとするのがなく、逆に同母弟である曹植に特別な配慮を払い続けたと言える。

曹植は朝廷の使者を脅迫したことや、言動を慎まないことなどによって何回も罪を奏上されたが、比較的軽い処罰にとどまったり、実質的な処罰を受けなくて済んだ。その背景にあると思われる曹丕の庇護は無視できない。曹植の作品にも、兄曹丕への真摯な感情が見られる。以上を通じて曹丕と曹植の関係の実相を探った結果、二人の間に関係の起伏があったとしても、兄弟の情愛は変わることがなかった、という結論を出した。

◆福島俊子 老舎『黒白李』読解—キリスト教による社会改革論の挫折？—

老舎のキリスト教受容には二つの要素があると考える。一つは教義への信奉であり、もう一つはキリスト教による社会改革を目指したことである。後者は入信直後の活発な活動、特に教会の中国化に代表され、初期作品にもその反映が見えるが、五年に亘る英国滞在を経て、帰国後の三十年代半ば頃にはこれを断念し、その後ペンを武器に抗日戦線に参加した。発表では老舎の入信経緯と教会の中国化活動を略説した後、一九三四年発

表の『黒白李』の本文を引用しつつ、その読解を試みた。キリスト教の愛と自己犠牲で弟の身代わりに処刑された兄、社会主義思想の影響を受け暴動を起こした弟、この双方に老舎自身の投影を見た。日本の中国侵攻の激化に伴い、キリスト教による社会改革で中国を救うことの限界を悟り、老舎の若き日の志は挫折した。これを兄に、また新たな救国の道へと向かう老舎の意志と希望を弟に見た。『黒白李』は、作者が執筆当時の自らの思想的転換を表現した小説であると読み解いた。

◆大西由美子 「舜子変」について—舜子説話の日中における変遷—

「舜子変」は、帝舜の説話を語り物として発展させた敦煌変文であるが、その成立の経緯や変遷を考察するために、まず各文献の舜説話について内容を比較した。そして舜の徳を称えることを主眼とする『史記』『孟子』等の「史記系」と、継子いじめ「にあつても孝を尽くす孝子を描く『法苑珠林』『舜子変』等の「孝子譚系」とに大別されることを明らかにし、関連

する漢代の画像石や北魏墓漆棺画等を紹介した。また、日本に残る舜説話もこの二系統に大別されるが、内容や表現には若干の違いがあることを挙げ、更に「舜子変」に於いて歴山で舜を助けて耕作する「群猪」と「百鳥」が、元代の『全相二十四孝詩選』では「象」と「禽」となっているため、その影響を受けた「御伽草子」や長湍の寶登山神社など江戸時代に建てられた各地の寺社建築には、舜が「象」と「鳥」と共に表されていることに言及した。

◆水津有理 詩人と妹、「妹」たち—北宋・王安石作品を中心に—

北宋の詩人・王安石（一〇二一—一〇八六）には二人の異母兄と四人の弟の他に三人の妹がおり、それぞれ士大夫の家庭に嫁している。王家の女性たちは王安石の母、妹たち、また娘たちもそれぞれ詩才に恵まれていたことが当時から語られており、王安石的集には詩題にそれら妹の名のみえるものが十三首残されており、それらは全て既婚の、もしくは嫁ぐ妹に寄せた作品である。また、三人の妹たちのなか

でもとりわけ長妹である文淑に寄せた応酬詩からは、兄と妹の詩の応酬が十分に活発なものであった。ところが推察で書いた作品を「妹」文学の一つとして読み、北宋に至るまでの「妹」文学（妹、もしくは姉妹に寄せた詩文）の系譜をたどるとともに、王安石の文学と妹たちとの関わり、また北宋末期以降の士大夫の家庭出身の女性詩人（詞人）の登場との関わりについて初期的な考察を述べたものである。

◆泰田利宋子 童蒙教育書の系譜——どんな子供に、何を教えてきたのか？——

中国では、古代から童蒙教育が重要視されてきた。「童蒙教育」とは、幼く、まだ道理の分からない子供を教育することを指し、「童蒙教育書」はそのための書を指す。本発表では、童蒙教育書の三つの発展段階である唐代と五代以前を「黎明期」、宋代から清代中葉までを「発展期」、清代中葉以降を「転換期」と定義し、各段階における代表的な教育書について「どんな子供に、何を教えてきた

のか」という点に注目しながらその系譜を整理した。「黎明期」の『蒼頡篇』『急就篇』等は識字教育書としての役割が強く、王侯貴族や一部の史官だけが読むものであったが、「発展期」『百家姓』『三字経』の頃になると、対象者の裾野が一般層へと広がり、内容も徐々に規範教育の色彩を帯びて専門化した。「転換期」には、それまでの「博学重視」から「倫理道德教育重視」への移行が見られると言われる『弟子規』が登場した、といったように、代表的な書物の内容と、時代による読者層の広がりとを確認した。

◆童子華 謝朓詩における空間意識

謝朓の山水景物を描く詩は、常に「望郷」の思いを表し、目の前の山水景物を眺めながら、建康すなわち「京邑」を懐かしむことを固定的なモチーフにしている。また、彼は宣城にいた頃、山水詩を多く作っているが、それらの詩には、「望郷」の思いだけではなく、隠逸への憧れもしばしば現れている。隠逸とは、山や森などの人里離れた場所に住むことであると一般的に考えられている。しかし、もし

謝朓の隠逸観もそうであれば、彼の隠逸への憧れと「望郷」の思いとは矛盾しているのではないか。謝朓は詩に山水景物を描くとき、自分の心象をも表し、景と情の融合する審美的空間を作っている。この審美的空間の描き方から、彼の「京邑」に対する認識や彼の隠逸と「望郷」との関係を検討することができるのである。本発表は、謝朓の宣城期の詩を中心に、詩における空間の描き方、「京邑」に対する意識、「望郷」の思い、という三者の関係を考察し、謝朓詩における空間意識を明らかにした。

◆阿部沙織 華人女性作家の自伝的作品における「華人性（チャイニズネス）」について——徳齡、凌叔華を例として——

本報告では、西太后の通訳兼女官を務めた徳齡の自伝『童年回憶錄（Kewowan）』（一九二九年）に焦点を当て、フェミニズム的とも言える女性意識の表出や、過剰に描かれる父親と言及されない母親の存在などを指摘し、徳齡の性別・民族・東西・階級をめぐる複雑なアイデンティティ・ポリティクスに迫る

端緒とした。また、同様に中国から海外に居を移し英語で自伝を書いた凌叔華の『古韻 (Ancient Melodies) 』(一九五三年)とも簡単な比較を試み、華人女性作家が海外で自身と故国を語る際にどのように「華人性 (チャイニーズネス)」を表象するのか、両者の作品に共通点はあるのかについても検討した。両者は中国の封建制の女性に対する抑圧を告発するという共通項を持ちながらも、徳齡はその抑圧を一品官である父親の権威の庇護のもと跳ね返すというねじれたジェンダー・アイデンティティを作品に表出していること、一方の凌叔華は語るすべを持たない母親世代の声を拾い上げ女性の連帯を実現しようとしたことを指摘した。

報告後フロアからは凌叔華の渡英後の作品に文体の変化はあったのかなどの質問をいた、だくなど、未熟な報告に対し少なからぬ示唆に溢れるご意見を賜った。記して感謝申し上げます。

◆但継紅 「偶然」から必然へ…翟永明と「白夜」―(知識人への)自由な公共空間提供の重要性― 一九九八年五

月、中国の成都市玉林西路に、現代女流詩人の翟永明によって、一軒のバー「白夜」が開かれ、十年後に成都市寛狹巷子に移転した後も続いている。

「白夜」開店には、詩人である翟永明の経済的自立を求める理由があったものの、まもなく詩の朗読会をはじめ、幅広く文学、映画、戯曲、音楽などの芸術イベントを頻繁に開催するようになり、中国における文壇サロン、文化サロンの様相をなしてきた。

現在では、中国国内で影響力を持つ代表的知識人たちの、自由な文化的公共空間として、成都市の文化的シンボルにもなっている。

翟永明の記述によれば、「白夜」の開店やイベント開催の多くは、「偶然」から始まったということだが、この「偶然」のつらなりに潜む、詩人の思いはどのようなものだろうか。

本発表では、「白夜」の文脈として、いくつかの「偶然」事例を取り上げ、その「偶然」の背景にある詩人としての翟永明を読み解き、「白夜」の文化的意味

と役割を考察する。これは、翟永明の作品を読む上でも重要な手がかりになると考える。

(修士論文要旨)

◆鈴木結香 比較否定文「没有」「不如」「比不上」の比較―評価機能と比較値の有無からの分析―

現代中国語において、比較否定文を表す語句はいくつかあり、主に「没有」「不如」「比不上」が挙げられる。これらの比較否定文を比較した論文はいくつか見られるが、文の構造や語用機能での分析が多く、文脈の背景や前後関係を含めた比較をしているものが少ない。そこで本稿では、前後の文脈や背景知識が分かる小説コーパスから例文を集め、第二章では山田(2010)の評価機能の考えに基づき、「没有」「不如」「比不上」を中立叙述型と修正強調型に分類し、第三章では比較値の有無の偏り方から三つの比較否定文の違いを見る。ニュアンスや使用法の比較と比較値の有無の偏り方から、比較否定文「没有」「不如」「比不上」の違いを明らかにする。

◆寺澤貴恵 明治期における女子用漢文教科書の調査―女子用特有の教材を中心に― 明治期の漢文教科書研究において、女子用教科書に関する研究は数少ない。先行研究では、木村淳氏が『明治漢文教科書集成』補集Ⅱ別冊Ⅰで、興文社編『訂正新定漢文』と同編『新定漢文女子用』（以下『女子用』）を比較し、『女子用』特有の傾向を、女子の登場する教材の増加であると指摘している。

しかし、この『女子用』に採録された教材を詳しく見てみると、人物の登場しない、心得のような内容もある。これを仮に「女子の心得に関する教材」とした。そして、『検定済教科用図書表』に見られる教科書を調査し、この教材の性格を明らかにした。加えて詩教材の女子用特有の性格も明らかにした。

調査の結果、女子の心得に関する教材の多くは『女四書』等を出典とした女訓的性格を持つと分かった。それ以外の本を出典とした教材には、「家」に関する教材が見られた。

詩教材は、女子の登場する教材や女子

の心得に関する教材に関連した内容が見られた。また、簡野編の教科書のみ梁川紅蘭の詩が採録されていた。簡野は女子高等師範学校の漢文教師であり、女子の読書力低下を嘆いていた。そこで、女生徒を啓蒙する意図のもと詩才に優れた紅蘭の詩を採用したと考えた。

◆汪燕妮 現代中国語における「除非」条件文の意味分析 「除非」条件文は論理関係により、順条件文と逆条件文に分けることができる。順条件文の場合、条件が成立すると結果が生じる。結果単文に標識マーカーが必ず現れ、「除非」は二つの否定演算子「除」と「非」から構成され、条件単文に作用する。この場合、標識マーカーと見られる「才」、「要想」、「要」、「想」が同じタイプになる。省略することはできない。逆条件文の場合、条件が成立すると、結果単文に現れた事件が発生しなくなる。標識マーカーと見られる単語が存在するが、必ず現れるとは限らない。省略される場合もある。「除非」は一つの否定演算子として条件単文に作用する。

意味論の場合、「除非」反事実条件文の真理値を検討するために、真実世界に到達できないか、または遠い世界モデルを設置しなければならない。「除非」必要十分条件文の条件が成立する時、結果は必ず生じる。逆から推論することも可能である。「除非」反事実条件文も「除非」必要十分条件文の一種と考えられる。

◆鄒喬生 会話における中国語の主語省略について 本稿では、会話を中心に中国語の主語省略現象について考察し、認知語用論の面から省略にかかる制約要因と主語省略の語用的効果を明らかにする。

主語省略にかかる制約要因として、コンテキスト要素が考えられる。中には、即時的コンテキストと背景的コンテキストが存在し、本稿では、即時的コンテキスト要素を発話文脈要素と直示的要素の二つに、背景的コンテキスト要素を、人物関係、話者情緒、共有知識の三つに分け、それぞれ分析を行う。

主語省略に影響を与えるコンテキストは一つだけでなく、いくつか選択できる

コンテキストが同時に存在することがある。コンテキストの選択は、可視化の程度に関連し、即時的コンテキストより、背景的コンテキストの方が可視化が弱く、聞き手の意識に活性化されにくい。

なお、コンテキストによる主語省略には、主に二つの語用的効果が見られる。一つは、発話の焦点をクローズアップすることであり、もう一つは、表現を最適化することである。

〈近況報告等〉

◆加藤三由紀 阪本ちづみ著作集『張恨水の時空間―中国近現代大衆小説研究』（勉誠出版） 本学会に尽力された阪本ちづみさん（二〇一六年逝去）の仕事が、人生とともにされた牧陽一さんの編集で、くつきりと形になった。あとがきは詩に綴った牧さんの恋文である。

論者によれば、一九二〇～三〇年代のベストセラー作家だった張恨水は「中国の寛一お宮を作った」が、そのヒーローは日本の寛一と違って「賈宝玉の伝統を忠実に受け継いだ」お坊ちゃまだった。こんなふうに近現代中国文学を語ってく

れる研究者は他にいない。論文から、往事の読者がワクワクしながら頁を繰る姿まで目に浮かぶ。メディア、ジェンダー、装置としての病など、モダンな切り口で浮き彫りにされた張恨水の時空間は、私たちの世界に繋がる。同時代文学論や北京滞在期のエッセイも、沢野ひとしの挿絵が文を彩り、中国の市井に生きる文化の魅力を語っている。

もつと書きたかったであろう、阪本さんの一貫したテーマに連なる「胡山源と小姐作家」（本会報二十九号交流欄）も論文になっていればと、悔しく寂しい。中国大衆小説への扉を開いた本書が多くの人に読まれることを願う。